

# 性暴力と見えない傷

熊谷 博子

『世界』（岩波書店）1999年5月号 掲載

## 「私はやられるものなんだ」

一人娘が、昨年4月から小学生になった。入学そうそいやな話を聞いた。学童保育から帰る女の子が、180センチくらいある30前後の男に後をつけられ、そのまま家に入り込まれてレイプされたという。学童保育だから、一番大きくても小学校4年生だ。

実は私にもいやな思い出がある。

今でもよく覚えている雨上がりの午後だ。私は小学校1年生だった。晴れ着を着て友達の誕生会から帰ると、自宅の前で中年の男に呼び止められた。道がわからないから教えてほしいと、私の手に手帳を持たせた。家の前の黒い大きな木のごみ箱に、やおら立ち小便を始めた。残念ながら当時は、東京の町なかで立ち小便をする男の姿をよく見かけた。だから人前で性器を出すことの異常さには気づかなかつたし、困った人には親切にするように教えられていた私は、じっと黙って立っていた。

男は突然襲いかかり、私を向かいの家の茂みに連れ込んだ。声も出せずただもがいていた。偶然近所のお姉さんが通りかかり、のぞき込んだ。「博子ちゃん、何してるの」

男は慌てて逃げていった。すぐに警察が呼ばれたが、犯人は捕まらなかった。

これがそもそも、その後起きることの発端だった。

顔は幼い子どものままだったが、体は急激に成長し、アンバランスになっていった。おそらく、もっとも狙いやすい相手だっただろう。映画館の中で、プールの中で…。実に様々なことが起きた。そして私は、決して声をあげることがなかった。手を入れられ何をされても、ただ隅の方に体をよせてじっと逃げていた。恥ずかしかったし、何回か続くと、いつの頃からか私はやられるものなのだ、という刷り込みができてしまった。

ラッキーなことにそれが破られる時が来た。

中学2年の時だ。電車通学をしていた私は、その男にぶつかった瞬間、アスパラガスの缶詰が腐ったような臭いを感じた。太った詰め襟の学生服の中心から、見たこともない赤いソーセージのようなものがぶら下がっていた。よける間もなく手をとられ、押しつけられた。男がニヤツと笑った。比較的すいていた電車の中で、まわりは見ていたはずなのに、誰も何も言わなかったのはどうしてなのだろう。駅の水道でごしごし必死に洗ったが、ぐにゃっとしたものがずっとへばりついているような気がした。ショック状態のまま学校へ行き、たまたま途中で会った友達に話した。すぐに同学年の女生徒が全員集められ、女の先生が自分自身の体験を話してくれた。

若い頃、近所で女性たちが次々と被害にあっていた。或る夜、自分も後ろから襲われた。必死にもがいて相手に噛みつくと、ギャーという声が出て男は逃げた。帰って鏡を見たら、口のまわりは血だらけだった。相手の小指を噛み切っていたという。それで足が付き犯人は捕まった。

そうか我慢なんかなくていいんだ。相手の小指を噛み切ったっていいんだ、と知ってから、私は被害にあわなくなった。

『誰にも言えなかった』という、子ども時代に性暴力を受けたアメリカ人女性たちの手記があ

---

る。翻訳した森田ゆりさんは、アメリカで長い間、子どもへの性暴力防止のための専門家を養成してきた。出してからわずか半月で、2～300通の手紙をもらった。男性からのものもある。そのほとんどが同じ一文で始まる。

「今まで誰にも言えなかったけれど、今あなたに言いたいです。この本を読んで初めて、人に言ってもいいんだ、そして自分が悪いわけじゃないと分かりました」

こうした手紙を中心にできたのが、『沈黙をやぶって』という本だ。

葉書に名も住所もなく、送られてきたものもあった。

4,5歳の頃、荷車を引いてきた八百屋のお兄さんに空家に連れ込まれた。…痛い、コワイワルイコト。ただ泣いた。…

「それがなんであるかわかる歳になって、あのことがどうしても脳裏から消えない。心惹かれた方からのプロポーズさえ、それが真っ黒いシミとなって踏み切れなかった。子連れの人と添う気になったのも何故か許せるように思えたから。

いま初めて文字にして七十余年秘めた胸の傷が涙と共に溶けていく。

独り暮らしの婆より」

私も自分の体験を書いているが、22篇のうち、私と田中美津さんだけが本名だ。私が素顔で語れるのは、子どもへの性暴力で重い軽いを言うのはいやなのだが、レイプの類ではなかったこと。そして結婚して子どももおり、社会的に認められたポジションがあるからだ。でも背後には、自分の体験を話してしまったら、すべてを失うことになるとおそれている多くの女性たちがいる。

『沈黙の共謀』という言葉がある。70年代後半にアメリカで出された本のタイトルだ。

性暴力の加害者が強いる沈黙。被害者が守る沈黙。その沈黙を社会全体が受け入れ育ててきた、強固な関係だ。それを崩さない限り、解決への道は一步も進まない、森田さんは言う。

3年前の東京国際映画祭・女性映画週間で、『声なき叫び』という映画を見た。カナダのアンヌ・クレール・ポワリエ監督の作品で、79年にカンヌ映画祭で上映された。その後、全世界の女性に衝撃を与え、日本でも多くの女たちの手で自主上映が繰り返された。レイプを、犯される女の側から徹底的に描いている。私たちがよく目にするレイプシーンは、衣服をはぎ取られ、抵抗してもがいている女の姿だ。でもここではカメラは、倒された女の位置から見た恐ろしい男の顔を下からあおり、性器を出しておしっこをかけられるシーンも下からだ。自分がやられている気になり、恐怖がひしひしと伝わってくる。法廷シーンでは、性暴力を受けたたたくさんの子どもたちが登場し、発言をする。私は目からうろこが落ちる思いだった。こういう作り方があったのか、どうしてこういう作品が日本で作れないのだろうか。

## メーガン法

友人のテレビ・プロデューサー、橋本佳子さんから電話があった。アメリカに“メーガン法”と呼ばれる法律がある。7歳のメーガンちゃんが、近所の男にレイプされ殺された事件をきっかけにできたものだ。地域住民に対し、性犯罪者の情報公開を義務づけているが、これに関する番組を作らないかと。私自身が同じ7歳で、初めての恐ろしい体験をし、自分の娘もまた、その歳になろうとしていた。

ニュージャージー州のハミルトンは、マンハッタンから車で約2時間、静かな郊外の住宅地だ。白人の中産階級が住む、おそらくアメリカのどこにでもあるような町だ。ところが1994年7月

---

29日、この町が変わった。7歳のメーガン・カンカちゃんはその夜行方不明になり、翌日、近くの公園で死体で発見された。レイプされ、ベルトで首を絞められていた。犯人はすぐに捕まった。何とカンカ家の真向かいに住んでいた男だった。

ジェシー・ティメンデュカス、当時33歳。彼は5歳と7歳の少女への暴行未遂で、2回にわたり7年半の間、性犯罪刑務所で服役した過去を持つ。カンカ家は、このハミルトンに16年間住み、犯人は1年あまり、向かいの家に住んでいた。実は事件当時、この家には、性犯罪歴を持つ男が3人住んでいた。痴呆症の年老いた母がおり、その息子が性犯罪刑務所を出る時、仲間を2人連れてきたのだ。両親も近隣の人々も、そんなことはまるで知らなかった。

カンカ家を訪れて愕然とした。犯人がいた家は壊され、今はメーガン・メモリアル・パークになっている。でも本当に真向かいだ。間に道があるだけで、歩いて30秒もかからない。あちこちの子どもたちから贈られたぬいぐるみや人形が置かれている。ここにあるものはすべて、全米中の人々から寄付されたものだ。そして入り口の近く、メーガンちゃんが殺された場所は、楕円形の石を並べた遊び場になっている。木々には、メーガンちゃんが大好きな色だったピンクのリボンが結ばれ、風に揺れていた。

母のモーリン・カンカさんは、でっぴりと大柄な、飾り気のないやさしい感じの女性だ。

居間には、姉と兄にはさまれメーガンちゃんの写真。髪の毛をちゃんと後ろで結び、健康的に笑い、丸々と太った女の子だ。小犬を見ないかと誘われ、向かいの家に入っていった、という。

「メーガンの遺体を家族とともに確認に行った帰りです。横にポスターをはった1台のトラックを見ました。

『メーガンちゃんの権利はどこにあったのだ？ そいつが何者か知っていたら…』

その日のうちに、何百人もの人々が通りに集まってきました。みなお金や食べ物や花や、子どもたちからの手紙を持って、それがずっと続きました。これだけの人々が子どもと私たちのことをきづかってくれて…。最初は受け入れるのがすごくつらかったです。でもそのことが、私たちの人生を変えました」家族や親戚、友人、近隣の人々の手で何千というチラシや署名用紙を作り、全州に配った。こうして3ヶ月間で、43万通の嘆願書が集まった。州議会で、性犯罪者の情報公開を盛り込んだメーガン法が成立。96年5月、クリントン大統領は、有罪判決を受けた性犯罪者が移転してきた時は、氏名などの情報を地域に通知することを義務づける連邦法に署名して、言った。

「我々は人権は重視するが、子どもの安全と、親が子どもを安全に育てる権利は、あらゆる人権に優先する」

モーリンさんは、メーガンちゃんの写真の前で、目尻にこぼれた涙をちょっとふいた。「あの子が私たちのことを誇りにしてくれれば…。私も夫もわが子を守れませんでした。これがあの子にやろうと思ってできなかった、子どもを守る方法なのです」

「たった一人の母親が、世の中をこれだけ動かすことができたのは驚異です」と私。

メーガンちゃんの写真を指さしてやさしく微笑んだ。

「母親じゃないわ。私のメーガンよ。あの小さな顔が世界を動かしたのよ」

何回も同じ事を聞かれたらうに、メーガンちゃん和其他の子どものためを思って誠実に答える姿に胸うたれた。事件さえなければ、たくましいが平凡な普通のいい母親だっただろう。この肝っ玉母さん風の彼女のキャラクターがなければ、この運動はここまで進まなかった、と思う。

そして今やメーガン法は、1州をのぞき全米で実施されているが、やり方は各州で違う。

---

カリフォルニアでは、他州に先さきがけて、97年7月から、CD-ROMに64,000人の性犯罪者の情報を登録した。18歳以上であれば、免許証などの身分証明を見せ、犯罪歴のチェックの後、誰でも見ることができる。

サンフランシスコ警察本部に行き、ある郵便番号を打ち込んだ。人口約5万人の郊外の住宅地だ。たちどころに、41人の男の顔がカラーで現れた。横に名前、性別、生年月日、身長、体重、人種、目と髪の色、性犯罪歴、別名、刺青、傷などあらゆることが書いてある。人権的配慮は、住所がないのとコピーが禁止されていることだけだ。情報は3ヶ月毎に新しくしている、という。

しかし97年7月2日付けのサンフランシスコ・クロニクル紙によれば、CD-ROMに載っている性犯罪者の情報は、死亡や転居、行方不明、再度服役中などで、かなり違っており、またロサンゼルス郡では、情報の3分の2が間違っていたそうだ。

メーガン法の施行後、いくつかの悲劇が起きた。性犯罪者とされた人間が親と住む家に火がつけられたこともあった。アリゾナ州では、性犯罪者が引っ越してきたと聞いた住民が、不審な男を見つけ銃で撃ったが、正当防衛で逆に撃ち殺された。相手は何と、麻薬取締官であった。

## アメリカの子どもへの性暴力

ではアメリカでは、子どもへの性暴力の実態は、どうなっているのだろうか。最初に本格的な調査を行ったのは、ミルズ大学名誉教授のダイアナ・ラッセル博士だ。銀髪でがっしりした素朴な感じの女性だ。彼女自身、子どもの時と大人になってから、性暴力を受けたことがある、と語っていた。1978年に、サンフランシスコに住む930人の女性を無作為に選び、「セックスをする意図で行為を強制された」という意味での性暴力の体験をインタビューした。結果は、彼女の予想を上回るショックなものだった。

38%の人が、18歳までに何らかの性暴力を体験していた。家族や親戚など“身内”から受けた人は、16%。うち義理の父も含めた父親からが4.5%。“身内”以外の人間から受けたのは、31%。その中で、知らない人からというのは15%にすぎない。同じ人が“身内”からもそれ以外からも受けていることがある。

その後の多くの調査結果から、現在では、18歳未満の女子の4人に1人が、男子の6人に1人が、何らかの性暴力を受けていることが明らかになっている。

アメリカで、それまで伏せられてきた子どもへの性暴力が明るみになるようになったのは、1960年代半ばからだ。各州で、“虐待を知ったりその存在を疑った場合、子どもと接する職業を持っている者にはしかるべき機関に報告する義務がある”とする「虐待報告義務法（Child Abuse Reporting Law）」が制定された。そして虐待の報告を受け、調査などの初期的な介入を行う機関として、「子ども保護機関（CPS Child Protective Service）」が全米に設置された。

「子どもの虐待防止全国委員会（NCPCA National Committee to Prevent Child Abuse）」によると、1996年に、全国のCPSに、虐待されていると報告された子どもの数は、312万6千人。5年間で12%も増え、87年と比べると、45%も増えている。虐待には、身体的虐待、精神的虐待、放置などがあり、そのうち確かに虐待されていると確認されたのが96万9千人だ。

この中で性虐待は、9%だ。1980年代半ばから90年代始めにかけて、性虐待の報告件数が飛躍的に増えた。それまでは無視されてきた子どもへの性虐待の実態がはっきりとし、またレイプなどの性暴行に対し事実を訴えていこうという、女性運動の成果も大きい。

しかしこれに相對するように、「子ども虐待法の被害者の会（Victims of Child Abuse Law）」

---

が、全国レベルでできている。確かにNCPCAの調査を見ても、報告される36%は、明らかに虐待と確定できるが、58%は確定できないという。

真偽のほどはわからないが、実の娘に無実の罪で訴えられ、6年間刑務所に入ったジェイという男と、そのカウンセラー、支援者に会った。会って、話をした限りでは、話はへたくそで、ところどころ矛盾はあるのだが、正直で実直な感じはした。

この発端は、小学校で行われた性虐待防止プログラムだった。誰かに無理に触られたり、いやなことをされたりしたことはないかと聞かれた時、下の娘が、「昔お父さんにペニスを口の中に突っ込まれたの」と答えたのだそうだ。学校が警察に話し、彼は捕まった。

その2年前、別れた妻が4歳と7歳の娘を連れて、アイダホに行ったことがある。その時、妻の友達の息子のデイブにやられたんだ、という。無実を主張し、娘たちに会わせてほしいと言ったが、会わせてもらえなかった。

その後、一度だけ娘たちに会い、なぜダディと一緒に住めないのかと聞かれた。説明すると、ダディはやっていない、あれはデイブだった、誰にも言わないって約束させられた、そうじゃないと家に帰れなくしてやるからって。でももう、遅すぎた。それ以来娘たちには会っていない。自由になってから、この2年近く無実を求めて戦っている。

というのが彼の話しだった。彼のカウンセラーのキャロルいわく、今、子どもを持って離婚したい女たちにとって、夫の性虐待をあげるのが一番手っ取り早い、という。

## 性犯罪刑務所

メーガンちゃんを殺したティメンドユカスは、裁判のニュースで見ると、神経質そうなおどおどした白人青年である。彼の弁護士は、子どもの時、彼自身が父親から性暴行を受けたことがあり、父親が近所の少女をレイプしたのを見、兄弟・姉妹も虐待されているのを見て育った、という。

マンハッタンから車で1時間。彼が入っていた性犯罪刑務所を訪ねた。何の変哲もない田舎道を走っていると、「成人診断と治療センター (Adult Diagnostic and Treatment Center)、ニュージャージー州矯正局」と書かれた看板にぶつかる。表からではよく分からないが、よく見ると監視塔があり、窓の少ない建物。裏へまわると上に太い鉄条網をはりめぐらせた塀の中で、囚人たちがバスケットボールをしているのが見える。ここが性犯罪刑務所であるとは、知らなければ誰も気づかないだろう。

1976年に作られた。こうした性犯罪刑務所は、ワシントン州やマサチューセッツ州など全米に7～8ヶ所あるが、その中でもかなり早い方だ。性犯罪者は刑務所の収容者の中でも一番低く見られ、他の囚人たちからいじめに遭っていることがわかった。それで他から引き離し、もっと有効な治療をしようとした。当時は160人だった収容人数が、80年代に法律が厳しくなり、今は760人いる。州の性犯罪者のうち、再犯の可能性が高い3分の1が収容されている。現在120人があくのを待っている状態だ。

所長のプランティアー氏によると、一番気になる再犯率の調査をしてほしいと、州議会に要請しているが、なかなか予算がおりない。1980年代半ばの調査では、再犯率は88%だったが、これは当時の他の州の調査と大体同じだったという。

メーガン事件の後、世の中の非難と罵声を浴び、大々的な調査も行われ、治療スタッフは全員変わった。責任者のナンシー・グラフィー博士は、性犯罪刑務所の治療ディレクターという

---

イメージとはおよそ異なる。40歳前後、大柄でカーリーヘア、短いパールネックレス、モスグリーンシルクっぽいブラウス、黒のロングスカート、派手な顔立ちで何となくオペラ歌手の感じだ。しかし首には、いざという時の呼び子の笛をさげている。以前は被害者の側で仕事をしてきたが、犯罪者に自分を変える機会を与える、予防の仕事をしたかった、という。女性も含めた20人のセラピストがいる

他の刑務所では白人が20%、その他が80%だが、ここでは白人が60%、その他が40%だ。教育水準も高く、社会的にも経済的にも中産階級が多いそうだ。18歳から80歳までいる。

「性犯罪者は他の犯罪者に比べ、自分の怒りを性的欲求につなげてしまうのが問題です。特にレイプをやる男性は、女性に対しても怒りを抱いています」

「どうして彼らは性犯罪を起こすようになるのでしょうかね」

「性虐待を受けて育った生い立ちは影響しますね。その人々がみな性虐待をするようになる、とは言えませんが、虐待をする要因にしばしばなります。子どもに対して性犯罪を起こす人は、どうやって大人と関係を持つのかという感情が、不足しているように思います。子どもの方が、より心地よく安心できるのです。例えば近親姦をやる父親は、娘や息子がどれほど自分を愛してくれているのか、という話をよくします。大人どうしがつき合う時に生じる様々な衝突を解決しなくてすむので、妻や恋人よりその関係の方が、はるかに楽なのです」

自分の考えや気持ちを行動につなげていこうとする、心理療法を行っている。三段階あり、まず基本的な心の教育や性犯罪についての情報を与えた後、グループセラピーに入る。自分がどう感じているかを話し合い、さらにこれから自分がどう行動していくのか、という話になる。その間に、自分の怒りを管理することや社会での生活技術の訓練もする。ただ治療をして外へ出ても、非常に安定した環境にいないと、また起こす可能性はあるという。

広い部屋で、最終段階のグループセラピーをやっていた。10人の囚人が輪になって座り、その中に男女1人ずつのカウンセラーが入る。男性カウンセラーは年配の落ち着いた人で、ネクタイをきちんと締め、女性カウンセラーは、でっぷりしたお母さんの感じだ。ここが性犯罪刑務所でなければ、いるのは町で見かけるごく普通の男たちである。

グレッグという人のよさそうな、めがねをかけ、鼻の下にひげをたくわえた、体格のいい黒人を中心に話が進んでいた。しかし彼は、3回のレイプと2回のレイプ未遂を犯し、40年の刑を受けている。

彼の1回目のレイプの話しになった。最初のレイプの相手は妻であった。日本と違い、相手が妻でも合意がないのに暴力的にセックスをすればレイプとなる。

彼はトラックの運転手をしてきたが、その日はまだ仕事があるから残れと言われ、電話をせずにそのまま働き続けた。怒っている妻になじられ、すさまじい喧嘩からレイプが始まった。

**グレッグ** その後は、女性に人間としての価値が見えなくなってしまったんだ。ただセックスするための“物”だったよ。俺がしたい時にするための“物”という感じだったね。

**男性カウンセラー** それは君が子どもの時に、女性から必要としたものだろう。

**グレッグ** まわりに女性はいたけど、俺を育ててくれなかったし、やさしくもなかったよ。誰にも愛されていないような…。俺が他人の注意を引く方法は、盗みみたいなことしかなかった。風呂の中に入ってばあちゃんの足を洗わなくてはいけない、というのもいやだった。

**男性カウンセラー** そのおかげで、おばあちゃんをドレスの下からのぞくことはできたね。

**グレッグ** こそこそとね。それが俺のほうびだった。

---

そして彼は、自分の怒りの対象が特に母と祖母だったと話す。父親もかまってくれなかった。母親が自分をいらなかったのは、自分が親しい関係を持ったすべての女が自分を棄てたのと同じことだ、と。最初のレイプの時、彼には母親の顔が見えた。さらに2回目、3回目とより暴力的になっていった。

そうした彼の話に対し、何人かが、前は怒りもたまっていたようなのに、今日は自分のことを正直に話してくれて本当にありがとう、と言う。

最後にグリフィー博士の勧めで、それぞれがカメラに向かい自己紹介をした。

ジョンです。3人の年上の女性にレイプとレイプ未遂をし、30年の刑です（30代のどこにもいるやさしい感じの白人）

ヴィンセントです。6歳の姪に性虐待をし、6年の刑です（若いまじめそうなスポーツマンタイプの黒人）

ビルです。若い男の子たちに性暴行をして30年の刑です（めがねをかけた太目の人のよさそうな50代の白人）

リックです。自分の3人の娘たちを性虐待して20年の刑です（ひげをはやし、小柄でまじめそうな30代の白人）

ネッドです。自分の教会で8人の女の子を性暴行し、10年の刑です（大変まじめそうな、知的で紳士的な感じのするめがねをかけた30～40代の白人）

終わるとそれぞれが、今日を中心であったグレッグに握手を求めて抱き合い、また互いに部屋のあちこちで抱き合い、満足したように出ていった。彼らは30年、40年という刑を受け、おそらくは生まれて初めて自分の人生と真剣に向き合おうとしていた。

グリフィー博士は、自分のオフィスに、子どもへの性暴力を犯した2人の男を呼んでくれた。

ケン、銀髪でたくましい体つきの、30代～40代前半の白人だ。義理の娘が10歳から16歳になるまで、性暴行を続けていた、という。

「性暴行でもレイプと同じだよ。まず暴力が先だったから。仕事場でいやな扱いを受け、人からいろいろ言われ、酒を飲んで家へ帰ると、たいてい最初に会うのが娘だった」

「彼女に暴行した後、どう感じましたか？」

「やってる最中は、それが俺を傷つけたやつらをやり返す方法だったんだ。俺が気分よくなるために、誰か他のやつが痛みを感じなければならなかったんだ。その後では悪いとは思ったが、それくらいじゃやめられなかった。ただやってやってやり続けたんだよ」

ここへ来た3年前は、感情というものがまるでなかったが、今やっと自分の感情が働き出した。何であんな暴行をすることになったのか考え始めたところだ、という。

「もし自分の怒りについて話せていたら…。ボスに面と向かって問題をぶつけられたら…。妻と家や金のことで相談できていたら…。俺ももっと普通のいい人間で、あんなことはやらなかったかもしれない。起きないと思いたいんだよ。だけど心の中では、もし俺が世界一いい父親だとしても、起きたかもしれない、って。娘は、俺の中で必要なあるものを満たしてくれていた。正直なところそれが何なのか、まだわからないんだ」

エリックは、金髪青い目の、顔立ちの整ったきゃしゃな20代後半の白人の青年だ。9歳と10歳の男の子をナイフでおどし、服を脱がせてレイプをしようとした。

「僕はむちゃくちゃ威張るおやじと、2人の兄貴のいる家に育ったんだ。いつも僕のことを支配してたよ。13歳くらいの頃かなあ、性的にいたずらしたり試したりして、他の人をセックス

---

で支配できるってわかったんだ。それが他人を支配する究極的な感情に思えたんだ。他の人を  
思いどおりにできるんだ。兄貴たちがセックスなしで僕にしていたと同じようにね」

日本と明らかに違うのは、性犯罪者たちが自分の心を見つめ、こうしてカメラの前で話すのも、  
治療の一つであると考えている点だ。

囚人たちが、絵を描いている部屋に入った。顔や姿を撮られたくない人は出ていった。

背中を向けてただ黙々と描き続ける人々がいた。つぶらな瞳でにっこり笑う黒人の男の子の  
大きな油絵。祈るマザーテレサの水彩画。ミュージカルのキャッツの看板がかかる街。

きらきら光る川面とヨット。そして家族の風景。

## 近親姦

そんな中で、特に家族内の近親姦に焦点を当て、被害者も加害者もともに治療しようとする  
機関がある。サンフランシスコ郊外にあるジアレット研究所だ。

緑の木々に囲まれた何の変哲もないビルに入ると、正面にキルトが飾られている。マミー  
助けてと泣きながら扉をたたいている子ども、「パパどうして私を虐待するの」、真っ赤な大き  
な手の上に書かれた「ノー ダディ ストップ」、涙を流す子どもの大きな瞳、そして「私は自由よ、  
もう秘密はないわ」の言葉。いくつもの縫い目の中から、それぞれの痛い思いが伝わってくる。

心理学者のハंक・ジアレットは1971年に、近親姦の被害者のための治療プログラムを始め  
た。当時は近親姦の被害者は、女性100万人に1人だと思われていた。年間30件の相談しかなか  
ったのが、今や年間1000件以上もの相談がある。これまでに2万人以上の人がここを訪れた。  
その40%が、18歳以下の子どもたちだという。性虐待を受けた子どもたち、子ども時代に性虐  
待を受けて育った人々、その家族、そして加害者に対してのプログラムがある。

現所長のブライアン氏によれば、被害者とその加害者ではない親は、「子ども保護裁判所」と  
でもいうべきところから紹介されてくる。子どもが虐待を受けた時に介入し、子どもへの責任  
を負い、保護を保障する機関だ。多くの加害者は、裁判の結果ここに来る。たいていは6～  
12ヶ月間刑務所に入った後で3年近く、仕事を続けながら家族やパートナーとともに治療をす  
る。8年後の再犯率の調査をしたら、プログラムを最後までやった人は6%、やらなかった人は  
32%だった、ということだ。

ただしこの数字は、主に“家族内の近親姦”という事情を考慮しなくてはならない。加害者の  
98パーセントは男だが、2パーセントは女だという。母親やベビーシッターだそうだ。

私たちはここで現在治療中の3人に会うことになっていた。

キャシーは、娘が夫に性虐待を受けていた。“加害者ではない親”として紹介された。明るい  
ブラウンの髪にブルーの瞳のふくよかな女性だ。

子どもの時、知らない人に性暴力を受けたが、自分が悪いんだと思って誰にも言えなかった。  
高校で、生まれて初めて自分を気にかけてくれる人に会った。これで幸せになれると、大学  
も行かず結婚し、子どもができた。

「夫は娘をすごく可愛がっていたわ。娘が3歳の時、ひざの上に乗せて足を開いてくすぐって  
いるのを見て、びっくりしたわ。でも考えないようにしたの。4人目の子どもを産んで家に帰  
ると、5歳になった娘が言ったわ。パパと一緒に寝ながら、ペニスをしゃぶらせようとしたって。  
私は娘に、二度とこんなことがないようにするって、言ったわ。私はすごく恐かった。でも、  
何とか生活を維持したかったのよ。彼も二度としないと約束して、5番目の子が生まれたわ。

---

娘は11歳になっていた。私は娘を恐れていたわ。私も自分の心を閉ざしていたのね。どんな問題でも娘はいつも父を求めていたわ。彼もママのところには行かないようにと話していたの。生理の説明をしたのも、最初のブラジャーを買いに連れていったのも彼よ。

でもある日娘が友達に話し、その両親が警察を呼んだの。私はベッドの横で泣いて神に祈ったわ。どうか明るみに出ないで。娘のためではなく自分のために祈ったのよ。

娘ではなく自分を心配したことをものすごく恥じているのよ。だから私は自分のことを“加害者でない親”なんて呼べないわ。そんな親なんていないわ。子どもに起きていることを見ようとしなだけなのよ」

その夜警察は、夫はそのまま残して、娘をシェルターに連れて行った。彼女には、理解しがたい扱いだった。夫は翌日、家を出ていった。

「一番上の男の子以外は、子どもたちも皆、ここのグループセラピーに参加しているわ。最近になってたくさんのことがわかったわ…。二番目の男の子が、一番下の娘に性暴行を加えていたのよ。これが今、私の家族に起きていることなのよ」

彼女は今、地域の親の会の会長をしている。

「ここに来て最初の3年間、私は何も言えなかったわ。子ども時代に性虐待を受けて育った人と話すのがつらかったの。私も娘が必要としていたものを拒否して、そうさせていたんだって。いつも思い出して自分を責めていたわ。でも今は完全に違う人間になったわ。もう二度と、自分のミスで子どもに性虐待なんて受けさせないわ」

ベスは、弁護士をしているという、穏やかで知的な感じの女性だ。

「12歳の時に、父親に2回性暴行を受けたわ。一度目は私がシャワーを浴びた後に父が部屋に入ってきて、私のバスタオルを取って足の間をいじりはじめたの。鏡の前だったのよ。見れなかったわ。巽にかかっている感じだった。

2度目は、私はベッドに寝ていて、2人の姉妹がいるんだけどどちらかは同じ部屋にいたわ。気がついたら、父が横にいたの。私の胸を触りはじめたわ。最初は何が起きたのかわからなかったわ。恥ずかしかったし、恐かったけど何もできなかったのよ。寝ているふりをしていたわ。寝返りをうったら、父はやめたわ。その後すぐ寝室に鍵をかけたわ」

父親はアルコール中毒で、感じていることを言い合える家庭ではなかった。何もないようなふりをしていた。

「恐ろしくて混乱して、なぜこんなことになるの、誰も助けてくれないの、と思ったわ。でもどこにも行き場がなかったわ。子どもなのに自分の感情を抑圧していたわ。ここに来て2年たった今でもそう。本当はとても大変なことなのに大した事じゃないって。その部分をブラックアウトさせたいのよ」

姉妹や友達には話したことはあるが、両親と兄弟に話したのは、やっと1年前だ。お母さんの反応はどうだったのと聞くと、苦笑いをした。

「動転していたけど、ほとんど無反応だったわ。テーブルの上に顔をうつぶせたままで。私にしてみれば、彼女の役割は虐待していたのと同じだわ。現実を見たくなかったのよ。何も見えないというサインのようなものよ」

「ここで一番よかったことは？」

「人の話しを聞くのはとても助けになるわ。子どもの時に性被害を受けて大人になった人って、時間や状況は違っても感じ方は同じなのよ。私だけじゃないんだわ。気がおかしくなったん

---

じゃないかと思ってたけど、他の人も同じように感じてたんだって」

「日本でも同じように苦しみ、誰にも言えないでいる人たちに何か？」

「私はレイプされたり、性虐待を受け続けたのではないけれど、人生にすごく影響があったわ。もっとひどい経験をした誰かよりはいい、と思うのではなく、自分がどう感じたかを大事にして、それを認めることだわ。楽しくはないわ。でも結果は価値あるものよ」

ベスは穏やかに微笑んだ。

会う約束になっていた、加害者である父親のマークは、ついに現れなかった。

廊下の奥には、おそらく加害者が描いたと思われる絵。「怒りを取り除く」。「私の二重の声」。「種まき」は、大きな種から緑の芽がまっすぐに力強く伸び枝分かれする様。やっと芽生えた加害者の心を象徴するようだ。

ここには13歳から18歳の加害者のためのプログラムもある。さらに最近「虐待反応プログラム」を始めた。この中には、5歳から13歳の加害者になりかけている子どもたちのためのものもある。その子どもたち自身が性暴力を受けており、心と身体を癒し、次の性虐待への連鎖を止めるためだ。

## 表に出ない日本の被害者

ぐったりとした心と身体を引きずりながら日本に戻り、私は行き詰まってしまった。撮影させてもらえるような場所も人もないのだ。性暴力を体験した人々の会はいくつかある。でもそれは、同じ体験をした人々がやっと安心して話せる癒しの場だ。しかも過去に、自らの体験を話すことが役にたつと覚悟を決め、顔をぼかし声を変えてテレビの取材に応じた人々が、最終的に興味本位な扱い方をされ、皆一様に後悔していると聞いた。

それどころか被害すら、ほとんど表に出てこないのが実状だ。

性暴力被害研究会 S.A.R.A. が、1995年に関東・近畿を中心に、10代から70代まで2015名の女性を対象に調査を行った。「いちばんつらかった被害」にあった年齢を、どの世代でも20%前後の人が、3～12歳と答えている。レイプやレイプ未遂、むりやり性器にさわられたりしている。

被害が重く年齢が幼いほど、加害者が顔見知りの割合が高くなる。レイプの場合、3～6歳では、知らない人12.5%、兄弟25.0%、親戚25.0%、その他の知人37.5%。7～12歳では、知らない人30.8%、父38.5%、兄弟7.7%、親戚7.7%、教師7.7%、その他の知人7.7%だ。

そして全体で、性暴力の被害を警察へ届け出た人は、わずかに9.1%だ。特に加害者が父・兄弟・親戚などの親族になると、1.3%である。

東京医科歯科大学難治疾患研究所助教授の小西聖子さんが、1995年に、430名の男女大学生（うち男性83名）を対象に行った調査でも、同じような結果が出ている。「最も苦痛であった被害」を自由記述で書いてもらったら、約3分の1の人が、子どもの時のことを答えた。最も苦痛と感じた被害を警察に通報した人は、わずかに4%だ。

日本の法律も問題だ。強姦罪や強制猥褻罪は、被害者が事件から6ヶ月以内に告訴して成立する親告罪だ。しかも被害者が13歳未満なら状況に関係ないが、以上であれば、“暴行や脅迫を以って猥褻の行為や姦淫をした者”となっている。13歳をすぎれば、大きな大人に立派に抵抗できる、とでもいうのだろうか。暴行や脅迫がなくとも、声も出さず恐くてなされるがまま、というのが普通ではないだろうか。相手が顔見知りならなおさらだ。

---

1989年に埼玉で、宮崎勤の連続少女殺害事件が起きた。カナダで映像プロデューサーをしていた田上時子さんは帰国して、対応が20年は遅れていると愕然とした。アメリカやカナダでは、子どもへの性暴力を扱った、きちんとしたドキュメンタリーが生まれていた。そこで翻訳したのが、『わたしのからだよ!』だ。いやなふれあいをされたらノーと言おう、ノーと言ってもいいんだよ、という絵本だ。

私は友人である田上さんを通じ、彼女の関係する自助グループの話し合いを撮影させてもらえないだろうか、頼んだ。その中でただ一人応じてくれたのが、Mさんであった。

「4歳から5歳の間です。すぐ近くの店におつかいに行かされ、若いお兄ちゃんに途中のアパートを聞かれた。指差すともう抱きかかえられていました。床の上に寝かされたんです。私の上に馬乗りになって性器を出してきた。ぐるぐるまいた水まき用のホース、そういう印象で覚えているんです。音のない世界。でも色はついていて、空き家のアパートの押し入れやむき出しの床の様子、全部覚えています。自分は空中へ飛び上がって、それをもう一人の私が見ているんです。後で分かったんですけど、インターコースにはいたっていない。だけど床の上に精液がいっぱい落ちてたんです」

“空中からもう一人の私が見ていた”というのは、性虐待などを受けた子どもたちにしばしば起きるそうだ。“本当の私は壁の小さな穴に入っていた”と言う人もいる。自分を守るために、心だけは逃避しようというメカニズムが働くという。

「誰にも言っちゃ駄目だよと、お使い用に持っていったハンドバッグに10円玉を入れてくれました。戻ってお兄ちゃんが…と言ったら、母が釣り上がった目で、どうしてそなんついでいったのと、両肩を揺さぶられ怒られたんです」

現場検証も立ち会わされた。一人ぼっちだった。警官が聞きに来る時と、母がもう本当にこんなことをして、と言う時だけは来るが、恐かったね、と声をかけてくれる人は誰もいなかった。

「思春期になり、不安で母に話すと、言うんじゃない、とピシャッとはねのけられたんです。母親は、純潔とか口にする人でした。私はまともじゃない、普通じゃない、という意識がずいぶんありましたね。結婚もしたけれど、夫にも言えなかったです。『わたしのからだよ』を見て、田上さんに初めて話しました。責任は私じゃないんだ、大人の側にあるんだ、という発想に出会いほっとしましたね」

「それまで、自分をせめてた？」と田上さん。

「いかに子どもでも、知らない人について行っちゃいけませんよ、と言われてついていったから。だけど違和感があったんですよ。こんな悲しい恐ろしい目にあっただのに、どうして？って。でも悪いのは私なんだから責任は私にあるって。

小学校高学年から中学・高校にかけて、痴漢や露出狂にたくさんあったんです。みんな知ってるような気がしました。私に印がついていて…。母の表現でいう汚れた子だから。私は誰が見ても汚らわしい存在なんだ、だからこんな目に会うんだとずーっと思っていました。また母に言うたびに、油断があるからだと言われるから、どこにも行き場がなくて。すごい無力感がありましたね。私が幸せになれるという発想はゼロでした。子どもを産んでもしばらく思っていましたね。目の前に幸せなことがあっても、あんなことがあった私が入並みに最後まで幸せになれるわけがない、という思い込みがありましたね」

「サバイバーの自助グループをやってみてどう？」

「今、月に1回集まっています。同じ痛みを持ち、共感しあって、ここでは何を話していい

---

んだよ、でも話したくなければそれでいいんだよ、という安全な場所ができたんです。人が恐くて信じられない人々が、グループのメンバーであればつながれる。顔つきが明るく変わっていく。大丈夫だよ、という確認をしていくうちに、本来の力を取り戻し、パワフルになっていく。この9年間は、新しい発想や情報に出会うたび、私は普通なんだと自信を取り戻す作業でしたね」

「同じような思いをしている人たちへのメッセージはある？」

「あなたが悪いんじゃないのよ、あなただけじゃないのよ。私たちも一緒だから自分の力を取り戻せるよ。今日の日まで私たちは生き抜いてきたんだよ。楽ではなかったけれど、その誇りを持って。だからこそパワーがあるのだから。私たちはすごく力強いし、堂々と胸はって生きていけるんだよ」

田上さんと話す彼女を後ろから撮っていた。この力強い最後の言葉だけでも何とか肉声で伝えたかった。でも自分はまだ夫や子どもに話してあるからいいが、声で分かったら、親しくしている自助グループのメンバーも、サバイバーであるとわかってしまうかもしれない。体験をかくしている人も多いから、ということであった。私は生まれて初めて、自分の作った番組の中で、あの機械的な音声処理をほどこすことになった。

田上さんは言う。

「子どもへの性虐待は子どもの人権が侵害されている行為だ、というきちんとした認識が大人側にないと、子ども側には伝わらない。子どもは、今されていることは自分の人権が侵害されているのだ、と思わないと、SOSは出せませんから。モラルや弱者を守らなければという視点ではなく、子どもの人権からとらえる見方を早急にしないと」

でもその田上さんも、自らが阪神大震災を経験するまでは、性暴力を受けた子どもの心の傷を理論で理解していて、感情や体験では理解していなかった、という。

## 闇の中で耐える子どもたち

警察庁も3年前やっと、性犯罪の取り締まりを最重要課題とする方針を出した。中でも

神奈川県警察本部では、同年4月、全国に先駆けて、婦人警察官による相談電話を開始した。「性犯罪被害110番」だ。始めた頃は一月に40件だった電話が、今や250件に増えた。その3人チームの班長が、板谷利加子警部補だ。

横浜港に近いものものしい県警本部の中で、ここだけは異質の空間だ。板谷さんの様子は、私たちの持っているゴチゴチの婦人警官のイメージをこわす。おしゃれだ。黒っぽいストライプのスーツ、白いブラウス、パールのイヤリング、長い髪を後ろで束ね、きちんと化粧をし、薄いマニキュア。声は頼りになりそうなしゃがれ声。

「あなたなりに判断したのよ。自分ほめてる？ほめてないでしょ。いじめてるんでしょ。駄目だよそんなに自分をいじめちゃ。だまされたって一言で片づけないでよ。あの中であなたが必死に考えて正解をやってるんだよ。私は話を聞いていて、ああすごい子だな、必死だったんだな。心が痛いって叫び声をあげてるんでしょ、それをあやしてあげられるのはあなたしかいないよ。私にはあなたの心の叫び声が聞こえるよ」

何回かやりとりをしている、レイプ未遂の被害者の少女からのものだった。電話を切ってじっと考え込み、私の方を向いた。

「声を上げてもいいんだよって言うことはすごく大事なことなんですよ。今までの苦しみを出す突破口を作ることになるから。自分だけで悩んでいる人がどうしようと散々迷った挙げ句、

---

1本の電話で飛び込んでくるのだから、よけることはできないですよ」

板谷さんはかつて捜査一課で、被害者対策を担当していた。犯罪被害者やその家族の状況を気づかい、マスコミなどから守る仕事である。

「忘れられないのが、お姉ちゃんと妹を実のお父さんが交代でレイプしていた、という事件があって。お姉ちゃんの方が思いつめて家出して、警察に電話があって。それでいろいろ調べていたら、夜お父さんに交互に強姦されていて、挙げ句の果てにはお父さんの子どもを妊娠してるんですね。こういう悲惨なことが日本の中で行われているというのが信じられなかったですよ。犯人というお父さん、見た目はまともな人ですよ。それから姉妹も普通のお嬢さんたち。お姉ちゃんも無事保護されたんですけど、こんな思いをしてるんだったら、死んだ方がましだと二人でいつも話し合っていた。夜お父さんが部屋に入ってくるのがわかると、お互いを感じ取るものがある…。その事件がずっと心にあったんですけど、この仕事をやってみて、いくつもそれが埋もれているというのがわかりましたよね」

私もカメラの前で、板谷さんに自分の体験を話した。

「力はなくてもいいんですよ。一緒に泣いてあげる気持ち、受け止める気持ちがあればね、言葉なんかいらなと思いますよ」

長い沈黙の後、お互いに泣いた。

私たちマスコミは常に他人に不幸を語らせがちだ。でも本当はこうした問題は、取材する側とされる側の痛みの共有感がないとやってはいけないのだと、思っている。結果的にこのシーンは、局側プロデューサーとの方針の違いから、番組内に入ることはなかった。

「子ども性虐待防止市民ネットワーク・大阪」の「白書」によれば、全国の児童相談所で扱った数から推定すると、家庭内で年間約2300件の性虐待が起きているという。

私自身は、自分が子どもの頃に受けた“傷”はもうとっくに癒えているのだと思っていた。でも改めて自分と向かい合うことになった時、全くそうではないことに気づいた。番組内で伝えきれないことも多く、この文章を書き始めたのだが、1年もかかってしまった。深刻なフラッシュバックにしばしば襲われたからである。忘れていたいやな感覚が、皮膚や身体の中にまざまざとよみがえってしまった。

ある女性月刊誌の“読者のページ”に来た手紙だ。小学校2年の時に、学校前の米屋のオヤジにレイプされた。同級生で他に2人やられたらしいが、誰も言わないし、私も母親にも誰にも言わなかった。でも小学校にいる間中ビクビクして、学区外の中学校に行ってもようやく安心した。

また、家庭内で行なわれていることに見て見ぬふりをしている母親が、生活のすべがないから我慢するしかない、と言う話は時々聞く。しかし、自分ではもう主人を飲ばせられないからとうなだれた母親がいた、と聞いた時、心が凍りつくような気がした。

途中で私は正直なところ、かなりしんどかったので、この原稿は一生書きおわらないのではないかと思った。でも何とか書き続けられたのは、今この時にも、闇の中でじっと黙って耐えている多くの子どもたちがいる、という現実であった。

時間はかかると思うが、いつかきちんとした映像作品を作らなくてはと、心に決めている。